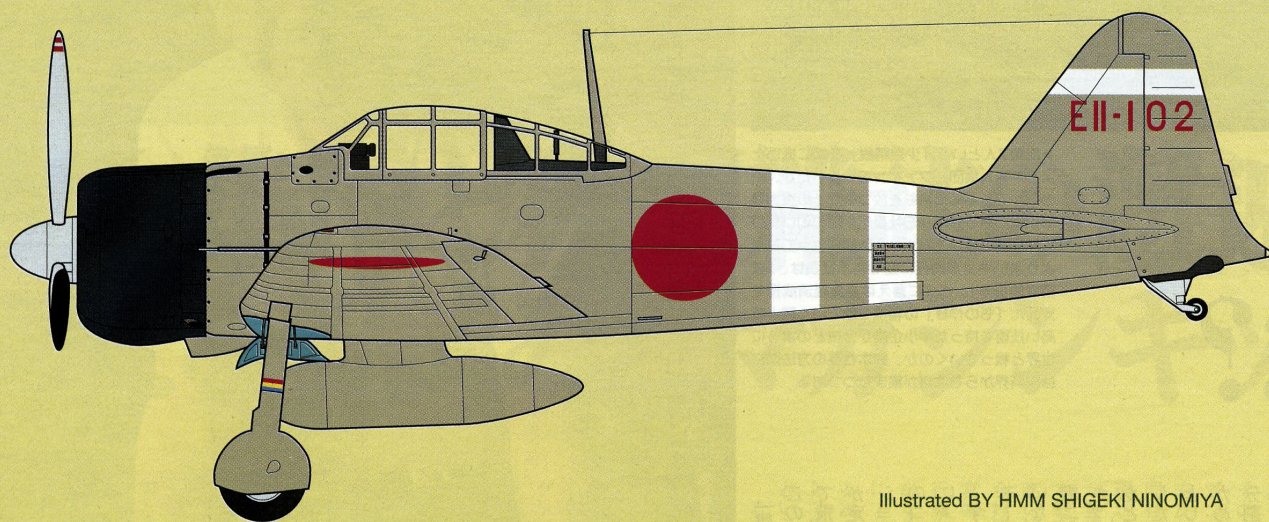


本誌創刊23周年記念特別企画

# Model Graphics

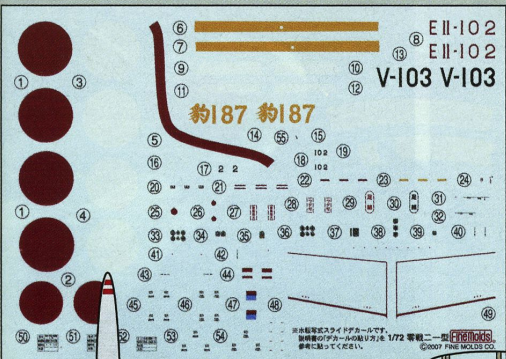
## 「至高のゼロ」 《接触篇》

超精密プラスチックモデル、「マガジンキット」1/72 零戦二一型を作る  
DELUXE MAGAZINE & KIT 2 IN 1, ULTIMATE ZERO "A CONTACT"



Illustrated BY HMM SHIGEKI NINOMIYA

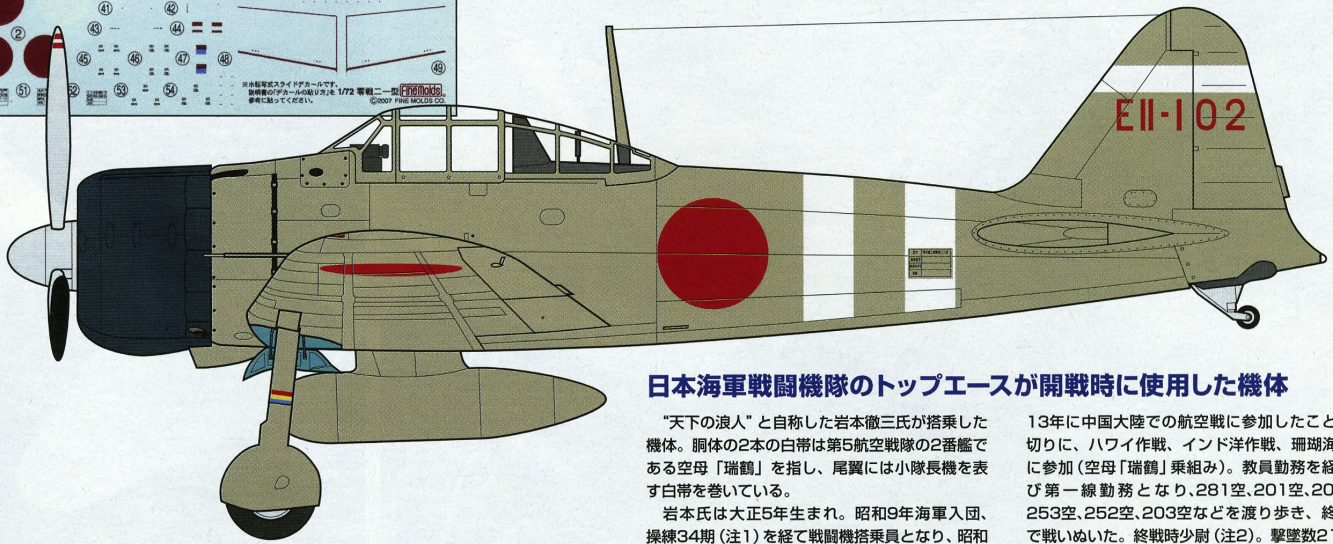
「マガジンキット」、ファインモールド製超精密1/72零戦二一型インジェクションプラスチックキット。形式的にはモデルグラフィックス11月号&12月号の付録ということになりますが、考え方としてはむしろMGが零戦キットの付録？ 通常のプラモデルに付属する組み立て説明書の役割を、今回はMGが担いましょう。このキットはこまかい部品も多く、「上級者向き」と言ってもいいような内容です。しかし、その高いハードルを乗り越えたときの喜びは何ものにも代え難いものがあります。そこで、この2号連続企画では雑誌の利点をおおいに活かしつつ、本誌読者のだれもがすてきな零戦二一型の完成品を手にするようにナビゲートいたします。



◀マガジキット1/72零戦二型に付属するデカールでは、本ページ掲載のこの3機のなかから1機を選んで製作することができるようになっている。いずれ劣らぬ魅力を持った機体ばかりなので、熟考のうえ製作する機体を選んでいただきたい

イラスト/HMM二宮茂樹  
Illustrated BY HMM SHIGEKI NINOMIYA

■第5航空戦隊空母「瑞鶴」戦闘機隊 岩本徹三一飛曹機 昭和16年12月



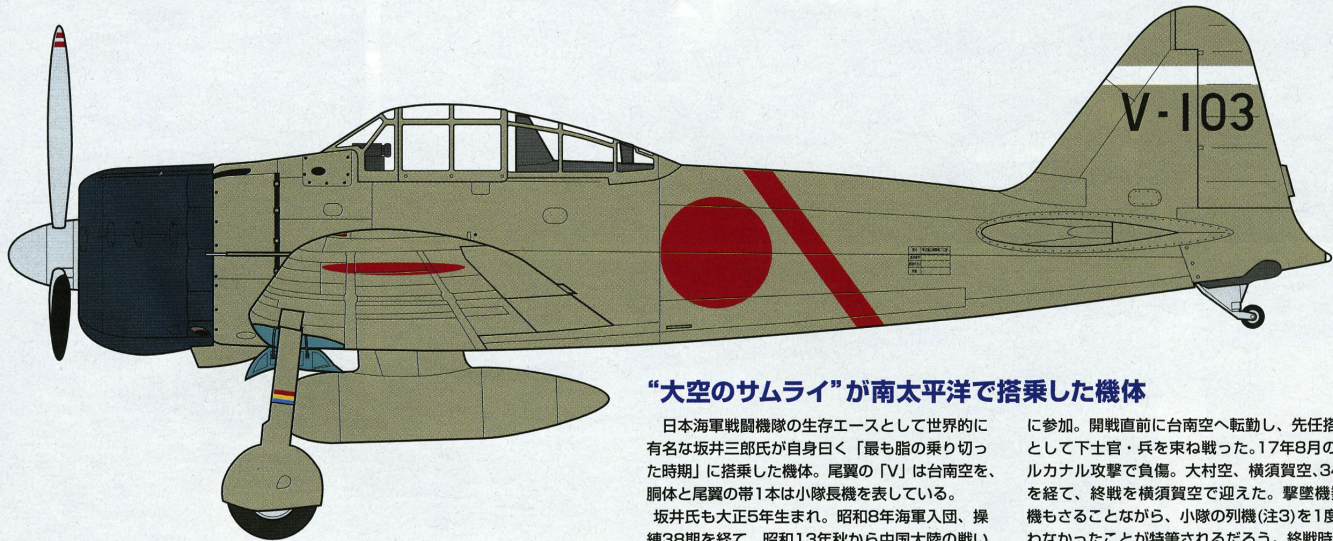
日本海軍戦闘機隊のトップエースが開戦時に使用した機体

“天下の浪人”と自称した岩本徹三氏が搭乗した機体。胴体の2本の白帯は第5航空戦隊の2番艦である空母「瑞鶴」を指し、尾翼には小隊長機を表す白帯を巻いている。

岩本氏は大正5年生まれ。昭和9年海軍入団、操練34期(注1)を経て戦闘機搭乗員となり、昭和

13年に中国大陸での航空戦に参加したことを皮切りに、ハワイ作戦、インド洋作戦、珊瑚海海戦に参加(空母「瑞鶴」乗組み)。教員勤務を経て再び第一線勤務となり、281空、201空、204空、253空、252空、203空などを渡り歩き、終戦まで戦いぬいた。終戦時少尉(注2)。撃墜数216機

■台南海軍航空隊 坂井三郎一飛曹機 昭和17年8月



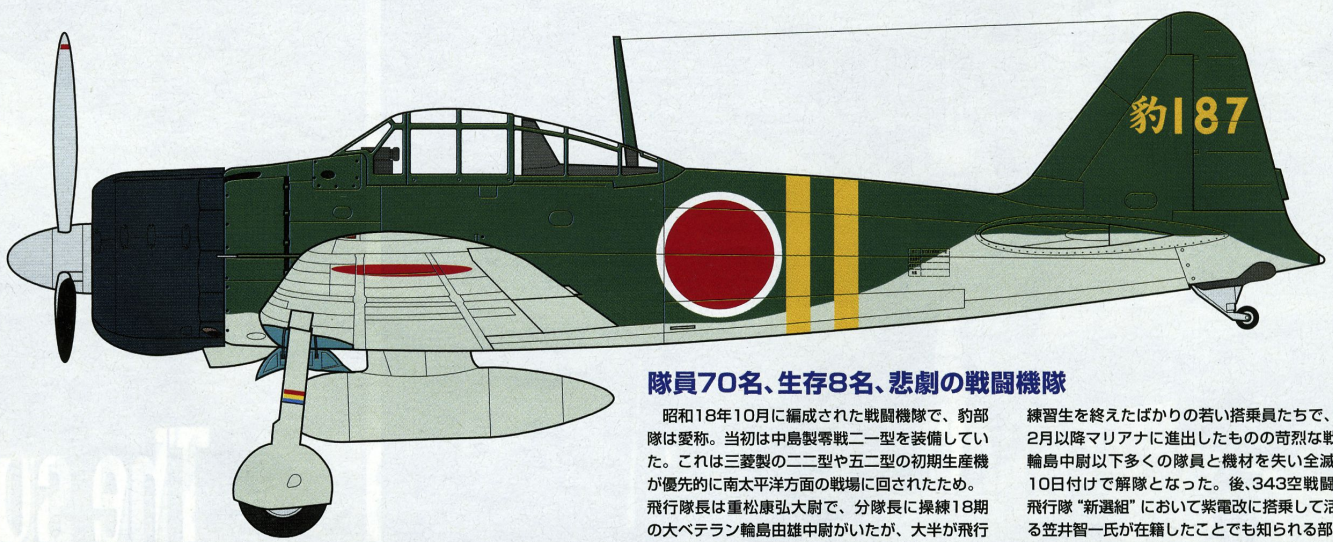
“大空のサムライ”が南太平洋で搭乗した機体

日本海軍戦闘機隊の生存エースとして世界的に有名な坂井三郎氏が自身曰く「最も脂の乗り切った時期」に搭乗した機体。尾翼の「V」は台南海空を、胴体と尾翼の帯1本は小隊長機を表している。

坂井氏も大正5年生まれ。昭和8年海軍入団、操練38期を経て、昭和13年秋から中国大陸の戦い

に参加。開戦直前に台南海空へ転動し、先任搭乗員として下士官・兵を束ね戦った。17年8月のガダルカナル攻撃で負傷。大村空、横須賀空、343空を経て、終戦を横須賀空で迎えた。撃墜機数64機もさることながら、小隊の列機(注3)を1度も失わなかったことが特筆されるだろう。終戦時少尉

■第263海軍航空隊“豹”部隊所属機 昭和18年秋~19年初旬

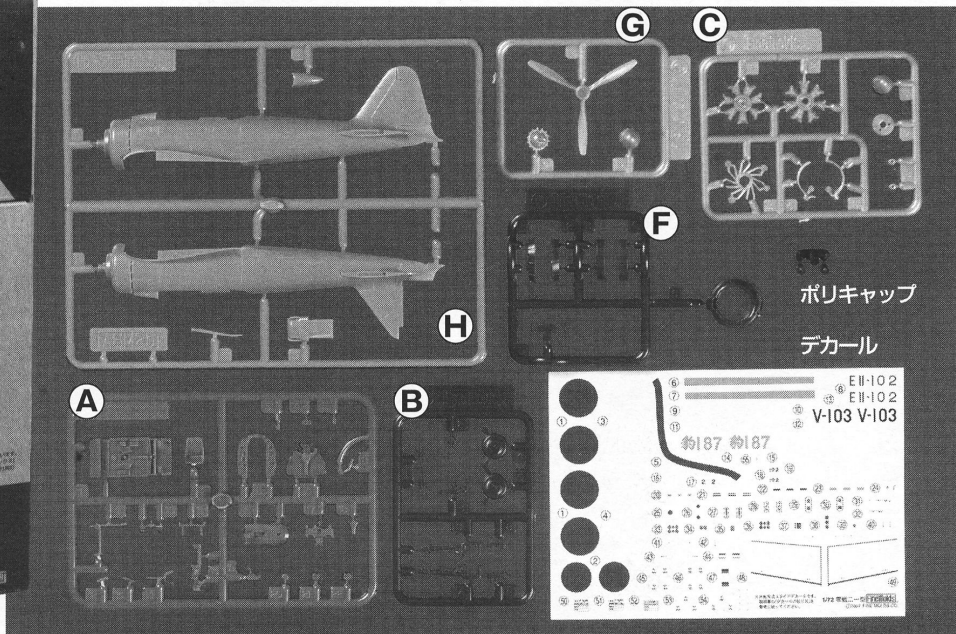


隊員70名、生存8名、悲劇の戦闘機隊

昭和18年10月に編成された戦闘機隊で、豹部隊は愛称。当初は中島製零戦二型を装備していた。これは三菱製の二型や五二型の初期生産機が優先的に南太平洋方面の戦場に回されたため。飛行隊長は重松康弘大尉で、分隊長に操練18期の大ベテラン輪島由雄中尉がいたが、大半が飛行

練習生を終えたばかりの若い搭乗員たちで、19年2月以降マリアナに進出したものの苛烈な戦いで輪島中尉以下多くの隊員と機材を失い全滅。7月10日付けで解散となった。後、343空戦闘301飛行隊“新選組”において紫電改に搭乗して活躍する笠井智一氏が在籍したことも知られる部隊だ

注1:「操練」…操縦練習生の路。すでに下士官・兵として海軍に籍を置く者を対象に選抜する飛行機搭乗員養成コース  
注2:「終戦時少尉」…昭和20年9月1日、予備編入にともない「中尉」。坂井三郎氏も同様  
注3:「列機」…中隊や小隊における部下の飛行機。また部下のこと



月刊「モデルグラフィックス」11月号「至高のゼロ・接触編」の付録の箱内には、下記の6枚のランナー（枠）、ポリキャップ、デカールが入っています。組み立てる前に、すべてのパーツがきちんと揃っているか、確認してください。

このセットのみでは1/72零戦二一型を完成させることができません。月刊「モデルグラフィックス」12月号（2007年10月25日発売・一部地域を除く）の「至高のゼロ・発動編」に付属のセットと合わせることで、一機完成させることができます。

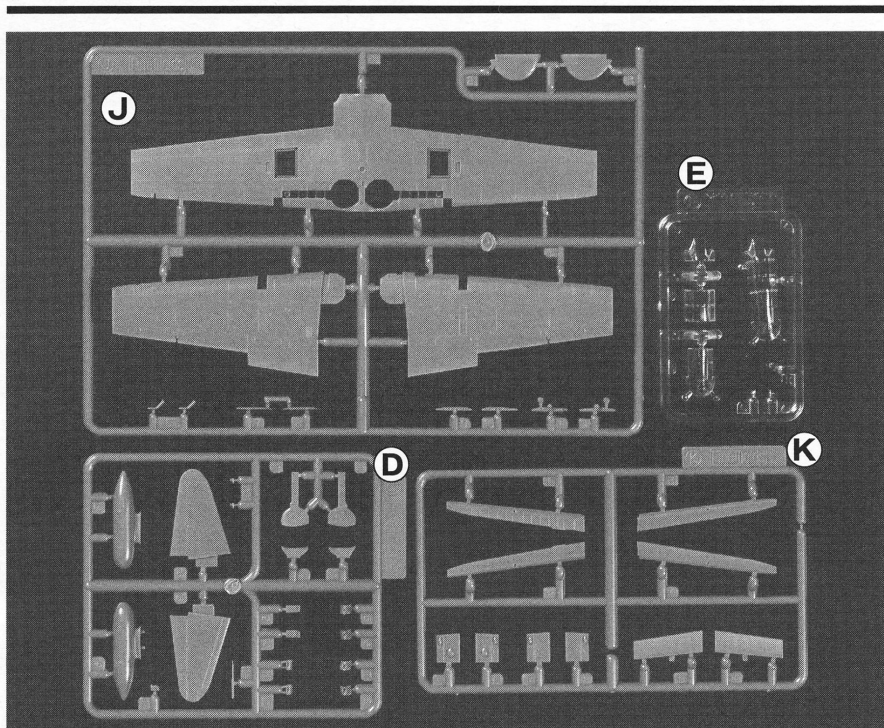
# 《接触篇》

- Aランナー ●Bランナー ●Cランナー ●Fランナー ●Gランナー ●Hランナー ●デカール ●ポリキャップ

## \*組み立てる前に必ずお読みください\*

(10歳以下の方が組み立てるときは必ず保護者の方もお読みください)

- ①「マガジンキット1/72零戦二一型」は組み立てモデルです。作る前に本特集記事をしっかりお読みください
- ②このマガジンキットには接着剤や塗料、工具は付属していませんので、プラスチックモデル用の塗料や接着剤、工具を別にお買い求めください
- ③部品を取り出したあとのビニール袋は、小さいお子様が頭から被ったり、飲み込んだりすると窒息のおそれがありますので、破り捨ててください
- ④部品はきれいに切り取り、切り取ったあとの不要部品や切り取りクズは「プラスチックごみ」として、お住まいの地域のルールにしたがって処分してください
- ⑤部品はやむをえずとがっているところがありますので、使用目的以外では絶対に遊ばないでください。とくに小さいお子様のいる家庭では、お子様の手が届く位置に放置しないでください
- ⑥小さな部品がありますので、誤って飲み込まないように注意してください。掛とくに小さいお子様やペットのいる家庭では注意してください
- ⑦組み立ての際、ニッパー、ナイフ、ヤスリ等を不用意に取り扱うと、刃先で怪我をするおそれがあります。10歳以下の方は保護者の指導のもとに取り扱ってください
- ⑧接着剤、塗料を使用する場合は、下記に注意してください
  - ・閉めきった室内では使用しないでください。中毒のおそれがあります
  - ・火の近くでの使用は絶対にやめてください。引火のおそれがあります
  - ・接着剤、塗料等は目や口に入れないでください。あやまって目や口に入れたときは大量の水で洗い流して、医師に相談してください
- ⑨工具、接着剤、塗料等、を使用する前には、その説明書の注意事項をよく読んで正しく使用してください



月刊「モデルグラフィックス」12月号「至高のゼロ・発動編」(2007年10月25日発売・一部地域を除く)付録の箱内には下記の4枚のランナーが入っています。本号付属のセットと合わせることで、一機完成させることができます。

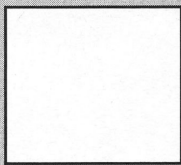
# 《発動篇》

- Dランナー ●Eランナー ●Jランナー ●Kランナー

## 至高のゼロ《接触編》

### 部品希望カード

「接触編」に付属のランナー（枠）のなかから、希望のランナーのアルファベット名を（または「デカール」と）記入してください。なお、「ポリキャップ」は対象外とさせていただきます。



月刊モデルグラフィックス 2007年11月号

### 部品を壊したり、無くしたりした際は……

紛失・破損により部品をご希望の方にランナー(枠)単位でお分けします。

左のカードに希望ランナーのアルファベット名を記入し(デカールをご希望の場合は「デカール」と記入ください)、お名前・ご住所・お電話番号をはっきりと書き添えたメモを同封の上、代金を現金書留または定額為替にて右記までお申し込みください。価格は1ランナー(またはデカール)につき各600円(消費税および送料手数料込み)となります。複数種をご希望の際は600円×希望数となりますことをご了承ください。なお、いずれの部品も左記の申込みカード1枚につき1キット分(1枚)に限らせていただきます(カードのコピー不可)。

【ご注意】この部品希望については対応期間を平成20年3月末日到着分までとさせていただきます。なお、模型店様ならびに製造元のファインモールドでは対応が出来かねますのでご注意ください。「ポリキャップ」は対象外とさせていただきます。

●お問い合わせ (株)大日本絵画 〒101-0054 東京都千代田区神田錦町1-7 ☎03-3294-7861 営業時間/平日AM9:30~PM5:00

### ■部品希望カード送付先

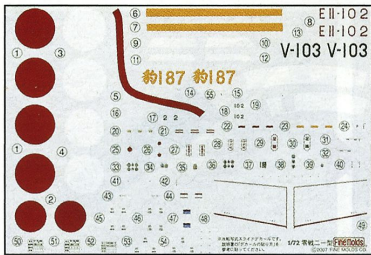
〒101-0054  
東京都千代田区神田錦町1-7  
錦町1丁目ビル  
(株)大日本絵画  
「MG至高のゼロ」部品請求係

\*製造には万全の注意を払っておりますが、万が一製造上の不良部品が内包してございましたらお手数ですがご購入月日およびご購入店様名をお書添えの上、不良部品を大日本絵画までご郵送ください。送料分の切手と代品をお送りいたします。



**組み立て解説図**

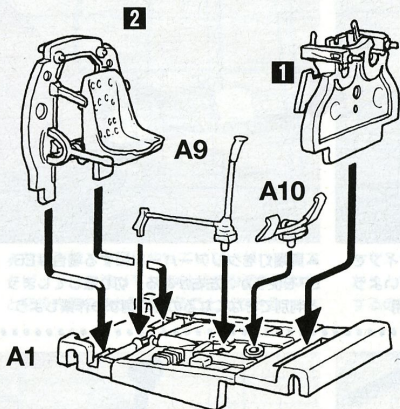
\*ここで掲載する組み立て解説図は先月号で掲載したものと同一ものです。  
Illustrated by Yukihsa FUJITA



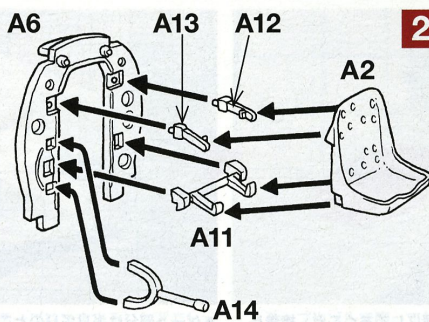
▲本キットには3機ぶんのデカールが付属します。デカールの指定はP34~36を参照ください。

デカールの指定は……

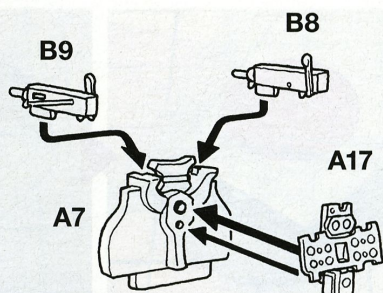
●A9は図を取り付ける前に取り付けます



3



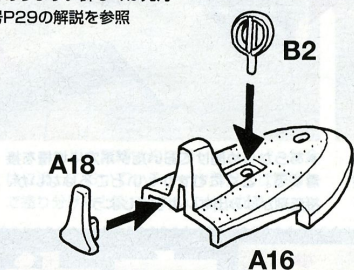
2



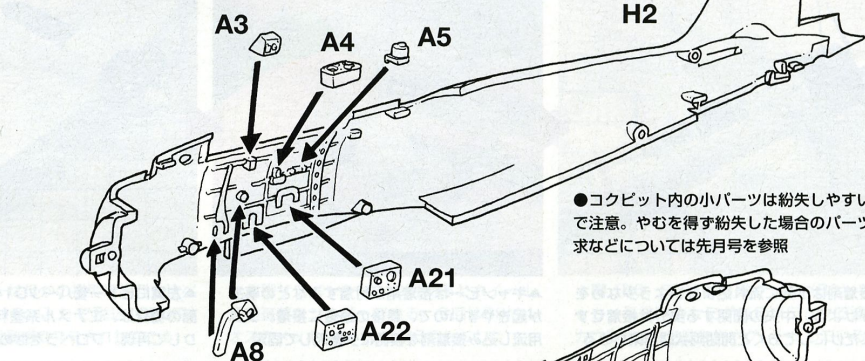
1

●B8, 9には左右がありますので注意

●B2は取り付けない機体もあります。詳しくは先月号P29の解説を参照



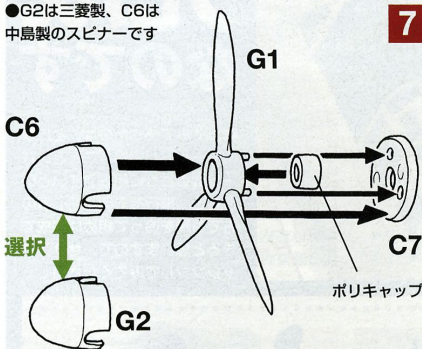
4



5

●コクピット内の小パーツは紛失しやすいので注意。やむを得ず紛失した場合のパーツ請求などについては先月号を参照

●G2は三菱製、C6は中島製のスピナーです

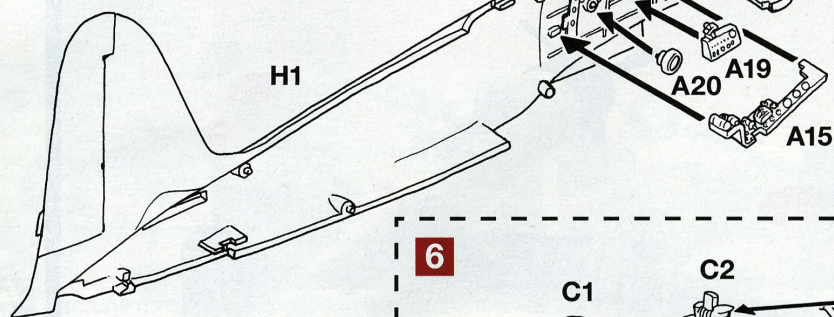


7

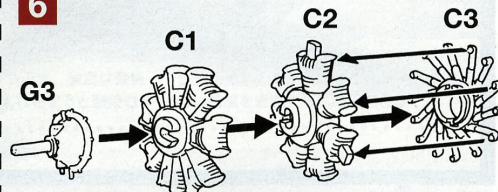
ポリキャップ

選択

選択

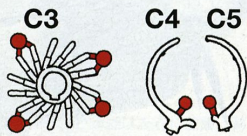


6

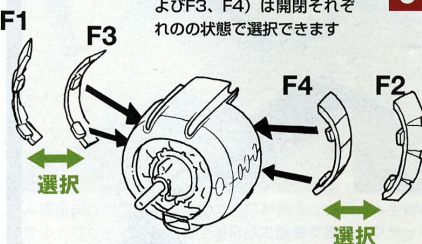


8

●C1, C2は向きに注意してください。C3, C4, C5には不要部分(赤い部分)がありますのでカットします

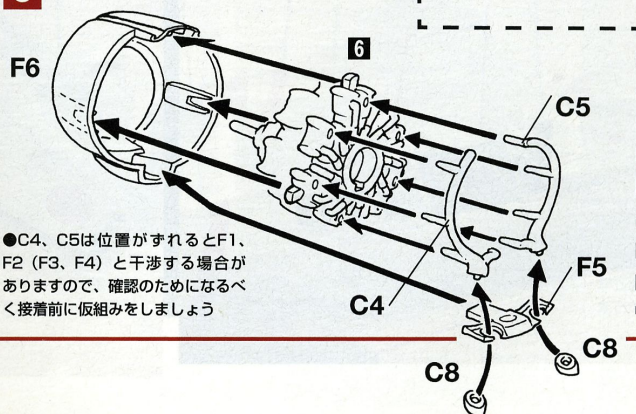


カウルフラップ (F1, F2およびF3, F4) は開閉それぞれの状態で選択できます

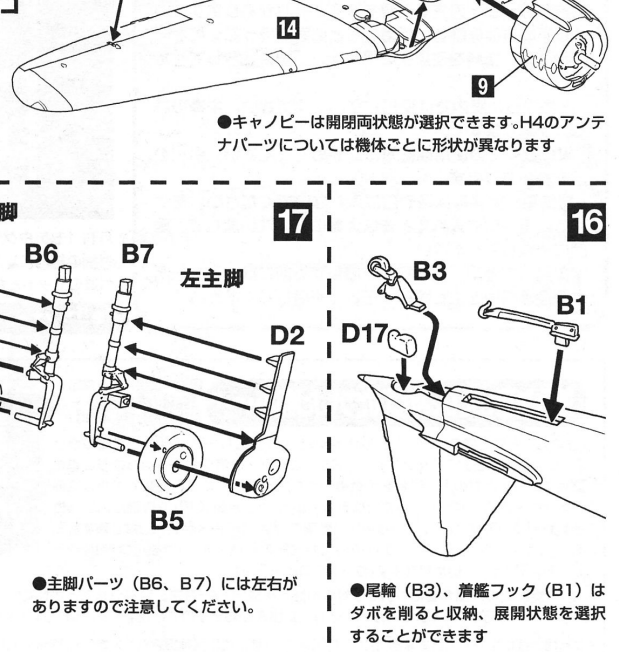
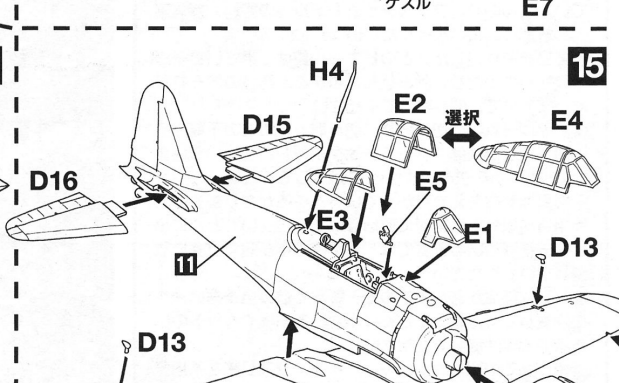
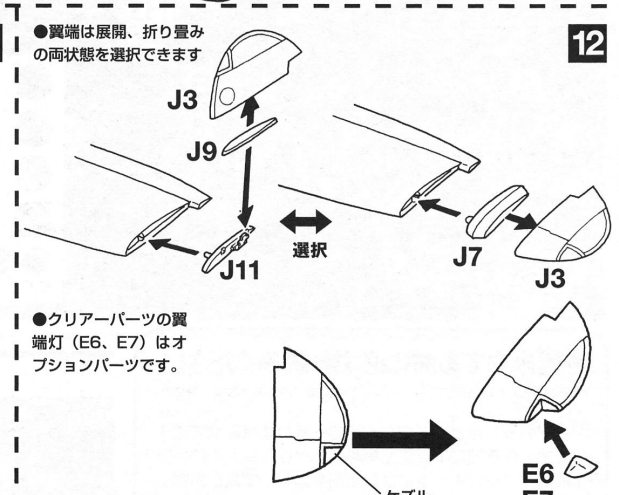
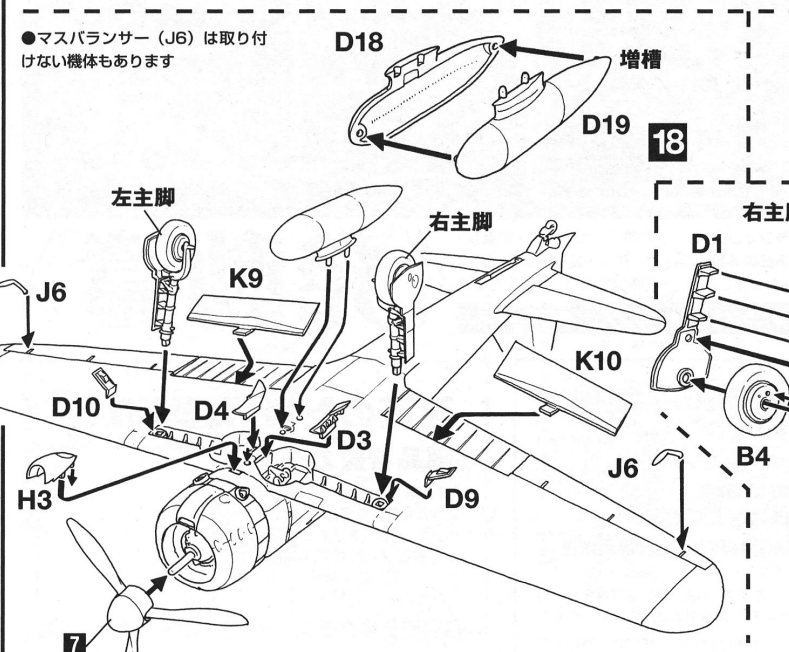
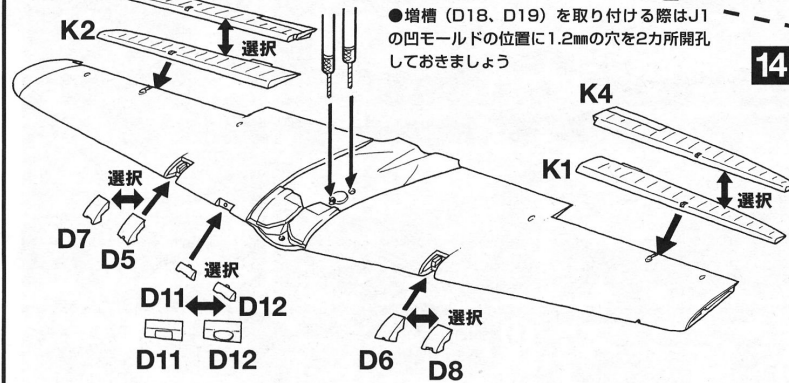
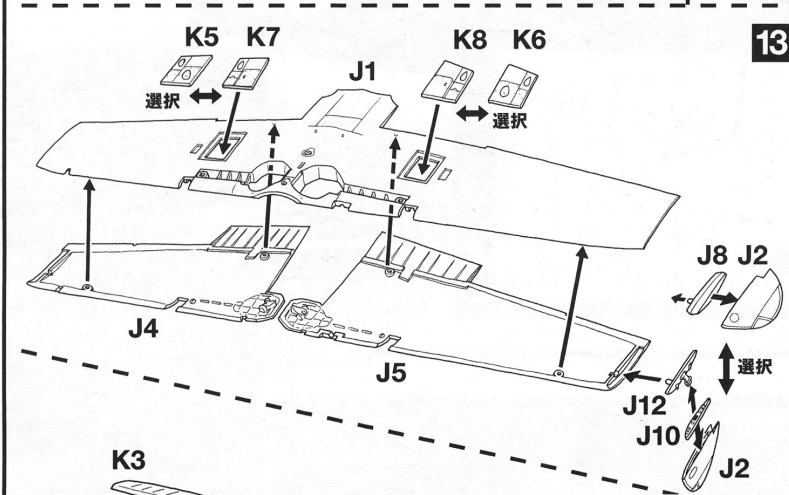
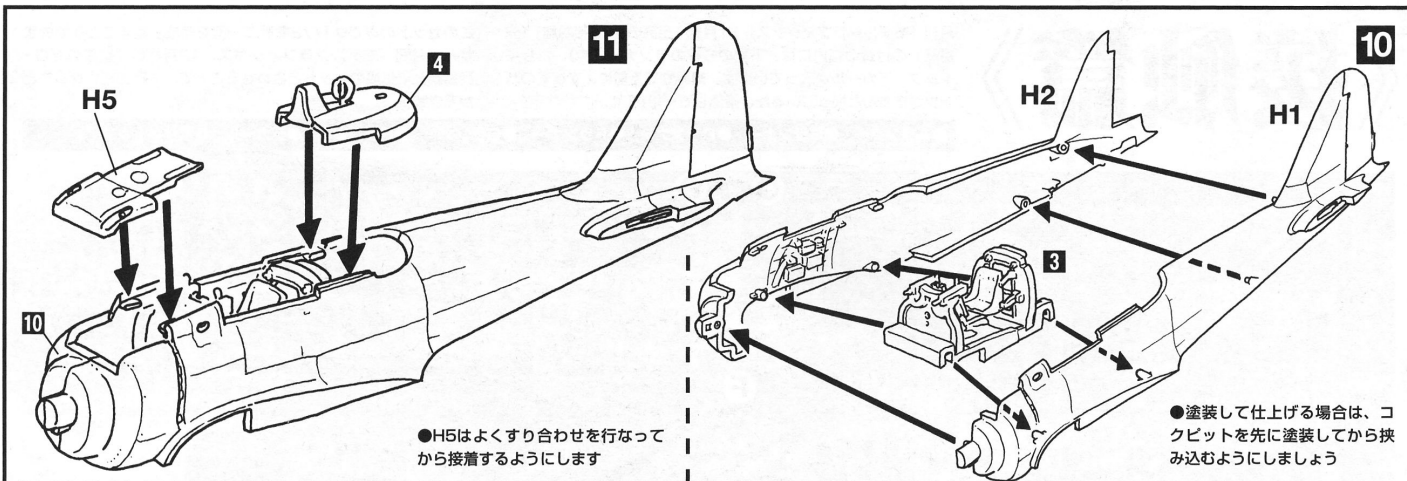


9

●C4, C5は位置がずれるとF1, F2 (F3, F4) と干渉する場合がありますので、確認のためなるべく接着前に仮組みをしましょう



8



## 第5航空戦隊空母「瑞鶴」 戦闘機隊

# 岩本徹三 一飛曹機

昭和16年12月

●数字で示してあるのはデカールの番号です。コックピットのデカール番号指示は先月号P19に掲載されています。なお、ここでは指示していないオマケデカールも入っておりますので、ご自由にお使いください。



## 日本海軍戦闘機隊の トップエースが 真珠湾にて使用

みずから「天下の浪人 徹」と称した日本海軍戦闘機隊のトップエース、岩本徹三氏がハワイ作戦（真珠湾攻撃）の当時に搭乗した機体は、主翼の補助翼にマスバランスが付き、操縦席口（頭当て）後方には母艦からの電波を拾って帰投針路に着くための「クルシー無線機」のループアンテナを装備するという、緒戦期の空母搭載「零戦」の特徴を持っている。

この機体のマーキングの特徴は、胴体に第5航空戦隊2番艦である空母「瑞鶴」所属機を表す2本の白帯を巻き（1番艦の「翔鶴」は1本）で、垂直尾翼の機番号上部には小隊長機を表す白帯1本をまわっている。

岩本徹三氏は大正5年島根県生まれ。昭和9年に呉海兵団に志願兵として入団の後、第34期操縦練習生を経て戦闘機搭乗員となった人物。昭和13年2月に第12航空隊で「九六艦戦」により中国大陸で初陣を飾り、その後の短い期間で14機撃墜の戦果を挙げた。昭和16年12月には空母「瑞鶴」戦闘機隊の中堅下士官としてハワイ作戦に参加、作戦当日の12月8日には機動部隊上空直衛隊の小隊長として発艦した。インド洋作戦、

珊瑚海海戦に参加の後、内地での教員配置を経て18年3月に再び実施部隊の第281航空隊へ配属、北方の守りに着く。

やがて281空の派遣隊としてラバウルへ進出、201空の指揮下に入り、以後204空、253空と所属部隊を変え、連日襲撃する戦艦連合を相手に苛烈な航空戦を展開することとなるが、これが彼の撃墜機数を劇的に増やす背景となった。

次々と挙がる撃墜戦果は、桜の形をした撃墜マークとして彼の変機に記入されたが、80機のマークを付けた最初の愛機は廃機となって還納、次が機番号「53-102」として有名な機体で60機のマークを付けた時点で大規模な整備となり、この間に代機として使用したのが五二型と推定される「53-104」だ。この機体でも16機を撃墜（三号爆弾による戦果を含む）している。これらの機体はさながら撃墜マークで桜色に輝くようであったという（※1）。

一時、内地へ帰還した岩本氏は252空戦闘316飛行隊の所属となり10月中旬の台湾沖航空戦に参加の後フィリピンに進出したが、下旬には再び内地へ帰還、千葉県茂原基地で252空

戦闘311の編成に携わることとなる。翌年2月16～17日に関東方面に米機動部隊が来襲した際には房総半島上空で劣勢ながらも敢闘する活躍を見せ、大きく気を吐いた。

さらに203空戦闘303に転属した岩本氏は沖縄航空作戦に参加。彼我の戦力に大きく差がつかず、穴だらけになった愛機でからも生還し、同隊の隊員たちから感嘆される場面もあった。その後、促成搭乗員養成に携わり終戦を岩国基地で迎えた。戦後間もない昭和30年5月、敗血症により38歳という若さで死去したが、氏が生前に大学ノート5冊に書きためた手記は今「零戦撃墜王」（光人社NF文庫刊）として我々も目にすることができる。後述する坂井三郎氏が「岩本少尉は敵機撃墜の名手」と評するように、巧みな空戦技術と射撃センスをあわせ持った戦闘機乗りであった。

※1……これら岩本氏の愛機の写真は現在までに発見されておらず、また乗機の機番号も戦闘詳報や行動調書に記入されておらず、マーキングは氏の回想によるところが大きい。

# 坂井三郎一飛曹機

昭和17年8月



## “大空のサムライ”が 南太平洋で搭乗した かの機体

『大空のサムライ』（光人社刊）の自著により世界的に有名な坂井三郎氏が台南海軍時代に搭乗した機体のひとつで、もっとも有名な零戦のひとつと云ってよいだろう。この機体は、マスパランスを廃した（補助翼内部に錘を付けた）二型で、基地航空隊機のためクルシー無線機およびループアンテナは装備していない。また信頼性の低い無線機を撤去し、そのため不要となったアンテナ柱をノコギリで切断したエピソードが坂井氏の著書でも紹介されているが、根本から撤去している機体もあるもので考証に苦しむところ。本機も長らく坂井氏の回想と同じ時期の台南海軍のほかの機体の写真から類推されて塗装図が描かれてきたが、近年になってほかの隊員が搭乗して未帰還となった「V-103」そのものが発見されたとの報告が坂井氏の元に舞い込み、写真ではあるものの「おまえ、こんなところにいたのか！」と感動の対面をしたようすが氏の著書『零戦の最後』（講談社刊）で紹介されている。この発見により胴体の斜め帯が赤であること、垂直尾翼の小隊長機標識が白であること、機番号が黒で記入されていることが確認された。

坂井氏も岩本氏と同様、大正5年佐賀県生まれ。海軍に入ったのは昭和8年と1年早く、搭乗員になったのは第38期操縦練習生を経てなのでひと足遅い。昭和13年秋には「九六艦隊」で中国大陸の航空戦に参加している。

昭和16年10月には新編成の台南海軍へ配属され、以後、先任下士官（※2）として若い下士官搭乗員の心をひとつにまとめ戦うこととなった。12月8日には台湾からのフィリピン進攻作戦に参加。さらに蘭印方面の航空戦に参加したのち、ラバウルへ進出し、ラエからのポートモレスビー攻撃に参加するなど、飛行学生を経て間もない中隊長の笹井醇一中尉（海兵67期）の右腕として転戦を続けた。この間、のちに大統領となるジョンソン上院議員の搭乗するB-26を撃破したり、同じ小隊長格の西沢広義一飛曹（乙飛7期）や太田敏夫一飛曹（操練46期）とともに敵地上空で3機隊隊返りを行なったりとエピソードには枚挙に暇がない。

しかし17年8月7日、おりしもガダルカナル航空戦初日に戦爆連合の一員として参加した際に頭部に被弾、負傷しながらも

単機航法をこなしてからくも帰投。内地送還となり療養に努めることとなった。このときの搭乗機が、この「V-103」であったという。

その後、大村空教員を経て横須賀空へ配属、19年6月に硫黄島へ進出してマリアナ方面作戦に参加したのちは、紫電隊の戦闘701で後進の教育に努め20年6月に武藤金義少尉と交代するかたちで再び横須賀空へ転属。終戦をここで迎えた。

長い第一線生活で小隊長として一度も列機を失わなかった事実もさることながら、生き残りえた者の責任として西沢一飛曹や太田一飛曹、列機である本田敏秋二飛曹など、とすれば記録の残ることが少ない下士官搭乗員たちの青春群像を現代に伝える著書を書き残したことは、大きく評価されてしかるべきであろう。

※2……いちばん軍歴が古い下士官のこと。たとえば坂井一飛曹と西沢一飛曹は同じ階級だが、海軍に入隊するのが早い坂井一飛曹の方が「先任」となる。

# MARKINGS Ver.3

第263海軍航空隊

## “豹”部隊 所属機

昭和18年秋～19年初旬



### 隊員70名、生存者8名 悲劇の戦闘機隊 豹部隊

第263海軍航空隊は、のちに343空戦闘第301飛行隊「新選組」で活躍する笠井智一氏ほか甲種第10期飛行予科練習生出身者が数多く配属されていたことで知られる。昭和18年10月1日付けで新編成された263空は、第1航空艦隊の第61航空戦隊の他の航空隊と同様、動物の名をもって「豹部隊」と称する戦闘機隊であった。

司令は玉井浅一中佐、飛行隊長は空母「飛龍」乗組みでハワイ作戦やインド洋作戦、ミッドウェー海戦に参加した経験を持つ重松康弘大尉（海兵66期）で、分隊長には大ベテランの輪島由雄中尉（操練18期）が腰をすえていた。隊員の大半は冒頭で述べたように飛行練習生を終えたばかりの甲飛10期生の若武者たち。もちろんいずれも実戦経験はなかった。その主装備機は「零戦二一型」。このころ、本家の三菱ではすでに三二型、二二型の生産を経て五二型の生産にとりかかっていたが、これら新鋭機は優先的にラバウル方面の航空隊へ引き渡され、内南洋と呼ばれる地域を守護範囲とする1航空艦隊下の各部隊にはまだ中島飛行機でバリバリ新機が生産中であった「旧式の新品」

二一型しか回ってこなかったからである。

19年2月17日に拠点であったトラック諸島が突如として空襲を受け、その基地機能を喪失したことにともない、1航空艦はマリアナ諸島へ展開することを決定する。その麾下航空隊であった263空も、同月21日に重松隊長、輪島分隊長ら先発隊の18機が硫黄島を経由してテニアンに前進した。ところが、23日にここへも敵機動部隊が襲来し、遊撃に上がった263空は輪島分隊長以下11機が未帰還となり全滅、重松隊長以下の生存隊員は一時内地へ帰還したのち、再度49機の兵力でガムへ進出することになる。このなかには、ちょうど3月に転動してきたばかり、山本五十六連合艦隊司令長官が戦死した際の6機の護衛戦闘機の一員であった歴戦の杉田庄一上飛曹（丙飛4期）が若手を引っ張るかたちで加わっていた。

3月30日にはペリリューへ移動し、翌31日には18機が遊撃に発進する。撃墜5機を報じたものの15機の未帰還機を出してふたたび壊滅する。5月に一度ペリリュー方面へ進出した263空主力は6月に再びガムに戻り、マリアナ近海を行動する米

機動部隊との攻防戦を展開するが損害も続出し、6月19日のマリアナ沖海戦当日にはほとんど戦力を失った状態となってしまっていた。

7月8日には重松隊長率いる6機がペリリューに進出の途次、敵戦闘機に奇襲されて重松隊長を含む5機が撃墜され、わずかに1機がペリリューにたどり着いた。7月中旬にはガムの主力も可動機ゼロとなり、残った隊員は陸攻に便乗して脱出。これに遡ること7月10日、この日付で263空は解隊となっていた。最盛時80人いた隊員の内、生存者は8名。その生存隊員も201空に転じてさらなる激戦の火中に放り込まれ、終戦までに次々と戦死していった。

「豹187」の機体の写真は「戦う零戦」（文藝春秋刊）に見ることができ、また神立尚紀氏の著書「零戦最後の証言2」（光人社刊）の笠井智一氏の項では豹部隊の零戦二一型の機首部の写真が掲載されている。同一機ではないとはいえ、同隊の装備機が銀色のプロペラ、「中島スピナー」を持つようすが確認できる。貴重な証言も掲載されているのでぜひともご一読いただきたい。